

令和元年6月21日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K12445

研究課題名(和文) 出会いと挨拶行動の相互行為論的研究 - 人間と動物の共通の基盤から

研究課題名(英文) Social Interaction in Encounter and Greeting: From the Common Basis of Human and Animal

研究代表者

木村 大治 (Kimura, Daiji)

京都大学・アフリカ地域研究資料センター・教授

研究者番号：40242573

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：この研究では、「出会い」とそこで生じる「挨拶」をテーマとして、人間と動物を同じ土俵の上で論じることを試みた。その結果、「出会い」は出会いと別れが繰り返される社会的なコンテキストの中で捉えられるべきであるというビジョンが明らかになり、そこで起こっているさまざまな事態の精密な分析事例を得ることができた。また、「別れ」においては、人間は挨拶を交わすものの、他の動物ではそういった行動は見られないことが明らかになり、人間の相互行為のユニークな性質を解明する手がかりが得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「出会い系」などという言葉がネット界に溢れるように、現代は人々が出会いに渴望し、出会うことが難しい時代である。なぜ出会いとはそのような難しさを孕んでいるのか。この研究は、この問いに答える方向性を示し得たと考える。また、相互行為論の領域においても、出会いはある種特異な存在であり、この研究はその特異さの原因をかなりの程度示すことができた。

研究成果の概要(英文)：In this research, we tried to discuss humans and animals on the same ground, with the theme of "encounter" and the "greeting". As a result, the vision was obtained that "encounter" must be captured in social contexts where meeting and partings are repeated. Through the research, we could have accurate analyses on various cases at encountering and parting. In addition, in parting, it became clear that humans exchange greetings, but other animals do not show such behavior; this finding will provide clues to clarify the unique nature of human interaction.

研究分野：人類学，コミュニケーション論

キーワード：出会い 挨拶 別れ 共在 焦点の定まった相互作用 焦点の定まらない相互作用 匿名性

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

「出会い系」などという言葉がネット界に溢れるように、現代はある意味で人々が出会いに渴望し、出会うことが難しい時代である。なぜ出会いとはそのような難しさを孕んでいるのか。このことは追究すべき問いだと言える。「出会い」という言葉は、新たな可能性を予感させるが、同時に、不安、逡巡といった形容が似つかわしい現象でもある。それは、出会いが相互行為の「それ以前」のない、始まりに位置することに起因する。相互行為において、それぞれの行為は通常、滑らかに「前」と「後」に接続される。しかし出会いにおいては、その枠組みを定める「それ以前のいきさつ」が存在しない。そのような意味で、出会いは相互行為の特異点であると言える、このことが「期待」と「不安」の源となっているのである。そして「挨拶」は、こういった出会いの不安定さを隠蔽し、定型的に相互行為を立ち上げていくための道具であると考えられる。そのため、挨拶行動で実際に交わされるのは空疎で形式的なやりとりとなる。これは、上記の「定型性」「道具性」と深く関わる性質である。また挨拶は、哺乳類や鳥類といった人類以外の生物の社会においても観察され、我々はそれを「挨拶」と呼ぶことの躊躇を覚えない(通動物性)。このことは、挨拶は人間のもつ知性や文化のもとに生まれたものではなく、より根源的な現象であることを示唆する。研究代表者たちは、これまで「インタラクション研究会」という集まりを通じて、人間と動物にまたがった相互行為に関する共同研究をおこなってきた。その過程で、こういった挨拶の持つ特異で重要な性質が浮かび上がってきた。

### 2. 研究の目的

「出会い」は、参与者間に「それ以前のいきさつ」がない場に、新たに相互行為を立ち上げるという意味で、不安定性と可能性の双方を孕んだ場である。そういった「出会い」本来の不定型性を隠蔽し、安定的に相互行為を運用していくための道具が「挨拶行動」だと考えられるが、この行動は、通常相互行為論の枠組みでは捉えきれない、儀礼性(空疎性)、通動物性など、さまざまな側面を持つ。本研究では、人間および霊長類を含む動物における出会い・挨拶行動を広範に収集し、相互比較することによって、出会いにおける不定型性とその定型化のプロセスについて、新たな進化史的モデルを構築することをめざした。

### 3. 研究の方法

研究は主として、人間および動物の相互行為を対象としている研究者を集め、研究発表および相互討論をおこなうという形で進めてきた。

初年度である2016年度は、下記の6回の研究会を開催した。

- 2016年5月28日 今後の進め方の相談会
  - 木村による説明、参加者からの動物の挨拶行動に関する映像の提示。
- 7月23日
  - 花村俊吉「HRAFの紹介・『あいさつ』分析の方法」
  - 坂巻哲也「霊長類研究の論文に出てくる『挨拶(greeting)』について、「ワンバのボノボ」の集団内で離れて遊動していた個体同士が出会った時の社会交渉について」
- 10月14日
  - 相原一究「カエルの発声行動の数理的・実験的研究」
- 2017年1月23日「匿名性」に関するブレインストーミング、映画「リゾラド」を見て、異文化間の出会いについて考える
- 2月12日
  - 香田啓貴「ヒト以外の霊長類の音声交換」
- 3月12, 13日 山梨における合宿
  - 木村大治「出会いにおける『規則』の性質」
  - 岩谷洋文「応援活動から見るパフォーマンスとしての出会い」
  - 岡田浩樹「『未知』との出会いとファースト・コンタクト絵 - 霊と地球外生命体の連続性と非連続性」
  - 花村俊吉「非対面下の出会いの特徴：チンパンジーの長距離音声を介した相互行為から」
  - 藪田慎司「『挨拶』研究で何を指すか：答えたい問題のリスト」

2017年度は引き続き、5回の研究会をおこなった。

- 2017年5月29日
  - 藤田翔「産業社会における人と動物(豚)との関係」
  - 花村俊吉 合宿のまとめと報告：「規則性=ありえなさ」のアブダクションとしての挨拶から制度化されたヒトの挨拶まで
  - 藪田慎司「挨拶」研究は何を指すか：何に答えたいか
  - 参加者全員によるブレインストーミング合宿(2017年3月19-20日)の議論の整理と展開
- 7月31日
  - 坂井田瑠衣「相互行為基盤としての身体」
  - 幸田瑞希「共在状態における相互行為のダイナミズム」

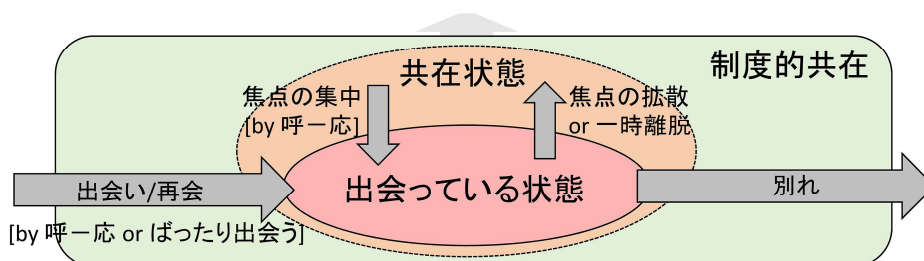
- 居關友里子 「別れの場面における言語的な挨拶」
- 11月26日 参加者全員によるブレインストーミング KJ法を用いて成果本の構想を練る
- 2018年2月15日
  - 岩谷洋史 「『見えないもの』をなんとかして見えるようにするための工夫：日本酒の製造現場における事例から」
- 2月22日
  - 木村大治 「ヒト・動物・地球外生命体の出会いと挨拶：成果本に向けて」
  - 花村俊吉 「KJ法のまとめと報告：二つの時間軸からみた出会いと挨拶の初発と反復」

2018年度は計画の最終年度であり、以下のような研究会をおこなった。

- 2018年5月20日
  - 幸田瑞希 「相互行為からの離脱の達成：発話と身体にみる志向の分散に着目して」
  - 藪田慎司 「動機づけの葛藤行動はなぜ進化的に維持されるか：不確実性への対応」
- 7月8日
  - 居關友里子 「『別れ』における相互行為：人間の言語的やり取りに着目して」
  - 田中文菜 「中部アフリカ狩猟採集社会における集団行動 - バカの遊戯の特徴 - 」
- 10月13日
  - 西江仁徳 「謎の行動『リーフクリッピング』からタンザニア・マハレのチンパンジーの出会い=相互行為への参入のしかたを考える」
- 12月9日
  - 牧野遼作 「多様な身体特性をもつ人々の相互行為の分析」
  - 花村俊吉 「成果本に向けて、出会い・共在・別れの共時的・通時的な見取り図を考える」
- 2019年2月10・11日 成果本概要発表，会話分析に関するレビュー
- 3月5日
  - 武田浩平 「双方向コミュニケーションの複雑性：ツルのダンスを例に」

#### 4. 研究成果

この研究では、「出会い」とそこで生じる「挨拶」をテーマとして研究を開始した。しかし、研究のプロセスの中で明らかになってきたのは、「出会い」は単独で成立するものではなく、出会いと別れが繰り返される社会的なコンテキストの中で考えないといけないということである(下図参照)。



#### ● 出会い/再会

- \* with 挨拶的行動 ≡ 挨拶
- [少なくとも一部の脊椎動物]
- = 「出会ったこと」の確認
- ≡ 個体識別
- 初: 相手が「誰」か確認(「あんた誰や」)
- ・ 求愛、闘争、仲間(階層性あり)
- ・ 制度的(匿名の)他者: 「役割」(制服・名刺)
- 非初: 関係(番・優劣・仲間)の確認

#### ● 別れ

- \* with 挨拶
- [ヒトのみ?]
- = 再会の約束(「関係を継続させること」の確認)?

#### ● 挨拶的相互行為の

進化や情動、ウチ/ソトとの関連  
形式的・枚挙不可能なことの理論的側面  
共存の様態や個体識別の有無との関連  
霊長類研究におけるレビュー

個体同士が「出会っていない状態」であっても、集団で生きる動物/人間においては、多くの場

合、過去における出会いの経験が存在するはずである。一方、現代社会においては、まったく出会ったことのない他者、つまり匿名の他者との間に出会いが生じることも多い(これは生物社会の進化においては比較的最近の出来事であると言えるかもしれない)。ともあれ、そういった個体同士の過去の歴史を引きずって、「出会っている状態」が生起する。しかし、「出会っている状態」も一筋縄ではいかないのであって、参与者たちは社会学者ゴフマンの言う「焦点の定まった相互作用 focused interaction」の状態と、「焦点の定まらない相互作用 unfocused interaction」の状態の間を行き来することになる。こういった状況の精密な分析の事例が、本研究のプロセスにおいて報告されたのは、大きな成果であると言ってよい。

さらに、「出会い」があるなら、その状態が解消される「別れ」も必然的に生じることになる。ここで興味深いのは、「出会いにおける挨拶」は、人間のみならず他の動物(霊長類、鳥類、さらに魚類)においても明確に観察される一方で、「別れにおける挨拶」は、人間以外の動物では明確な形で報告されたことがないという事実である。本研究では、人間と動物をできるだけわけへだてなく同じ土俵の上で論じることを旨としてきたのだが、「別れ」に関して言えば、両者の差が明らかになってきたと言え、このことは人間の相互行為の特徴を明らかにする上で重要なキーポイントであると言える。

以上の成果は、2018年度までにまとめることはかなわなかったが、2019年度中に原稿の検討会を重ねた上、出版をおこなう予定である。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計9件)

木村大治, 恥ずかしさの起源と進化, 現代思想, 査読なし, 2016年5月号, 2016, 198-211

木村大治, 海外における宇宙人類学の動向, 民博通信, 査読なし, 156巻, 2017, 16-17

中村美知夫, 『サル学』の視座 - 人間以外の社会を理解するには, 現代思想, 査読なし, 2016年12月号, 2016, 76-90

Hirofumi Inaguma, Koji Inoue, Shizuka Nakamura, Katsuya Takanashi, Prediction of ice-breaking between participants using prosodic feature in the first meeting dialogue. Proceedings of ICMI Workshop on Advancements in Social Signal Processing for Multimodal Interaction (ASSP4MI), 査読有り, 2016, 1-5. DOI: 10.1145/3005467.3005472

高梨克也, 多職種チームにおける協働のための工夫と困難 日本科学未来館展示制作チームのフィールド調査から, 質的心理学フォーラム, 9, 査読有り, 45-53

高梨克也, ボールへの到達時間を予測する - サッカーの間合い(前編)(後編), WEB 春秋 「<間合い>とは何か - 二人称的身体論」, 査読なし, Online.

Nakamura M, Nishie H. A five-year-old chimpanzee ranged alone: Reconsidering independence in ranging. Pan Africa News, 査読有, Online.

Nakamura, M. Are animals "others" or are there "others" to animals? Others: The Evolution of Human Sociality, Kawai K (ed). Kyoto University Press, 47-67.

園田浩司, 木村大治, バカ語話者にみられる発話の借用 - 「発話の権利」は普遍なのか -, 発話の権利(定延利之編), 査読なし, 2019年出版予定

### 〔学会発表〕(計10件)

木村大治, 平等性と対等性について, 生態人類学会, 2017年3月17日

中村美知夫, 野生チンパンジーの遊びに見られる多様性, 日本霊長類学会大会, 2016年7月15日

高梨克也, 「他者の認知の利用」に関する生態学的考察, 日本認知科学会第33回大会, 2016年9月18日

木村大治, 出会いと挨拶の相互行為論, 人工知能学会 SLUD(言語/音声理解と対話処理)研究会, 2017年7月28日

木村大治, アフリカの声の世界・共在感覚・インターネット・コミュニケーション, 日本的 Wellbeing を促進する情報技術のためのガイドラインの策定と普及・研究会 2018年3月11日

藪田慎司, 動物の「出会い」と「間合い」と「ディスプレイ」, 認知科学会 間合い研究会, 2017年

中村美知夫, 山上昌紘, チンパンジーがヒョウから獲物を奪う, 第33回日本霊長類学会, 2017年

花村俊吉, チンパンジー社会における共在の極限: 新入りメスのふるまいに着目して, AA研共同利用・共同研究課題: 人類社会の進化史的基盤研究(4) 第7回研究会, 2017年

Kimura, D. Everyday social interaction of hunter-gatherers: Progresses and prospects. 12th International Conference on Hunting and Gathering Societies, 2018.

木村大治, 共生と共在: トムとジェリーはなぜ仲良く喧嘩できるのか, 移動と共生~先史時代から近未来宇宙まで~ (名古屋大学), 2019年

#### 〔図書〕(計2件)

高梨克也, ナカニシヤ出版, 基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法, 2016, 161

木村大治, 東京大学出版会, 見知らぬものと出会う - ファースト・コンタクトの相互行為論, 2018, 304

#### 〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年:  
国内外の別:

#### 〔その他〕

ホームページ等

(1)研究分担者

研究分担者氏名：藪田 慎司

ローマ字氏名：YABUTA, Shinji

所属研究機関名：帝京科学大学

部局名：生命環境学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 50350814

(2)研究協力者

研究協力者氏名：高梨 克也

ローマ字氏名：TAKANASHI, Katsuya

研究協力者氏名：中村 美知夫

ローマ字氏名：NAKAMURA, Michio

研究協力者氏名：花村 俊吉

ローマ字氏名：HANAMURA, Shunkichi

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。